
フィールド

成太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フィールド

【Nコード】
N7056E

【作者名】
成太

【あらすじ】
いろいろな野球マンガがまじってるかもしれないけどよろしくお願ひします！

プロローグ

「あと一人！あと一人！………」

じりじりと日差しが照り付ける夏

舞台は甲子園球場

俺はその真ん中に立っている

「さあ、第92回夏の甲子園大会もいよいよラストバッターになるのかあ？西東京代表の都立藤川高校二年のエース桐島鷹虎が今振りかぶりました！」

なぜこのような事になっているかと言うと遡る事一年前の事になる

第一話 野球を辞めた理由…

桜の花が舞う頃俺は高校のグラウンドの横を歩いていた

「うはあ!？」

いきなり前に野球ボールが飛んで来た

「すいませ〜ん！」

叫びながら女子生徒が駆け寄ってくる

俺は腰を上げ制服を叩いた

「なんで野球ボールがあるんだ!？野球部ないだろ？」

俺は聞いたすると彼女は

「野球部はないけど同好会ならあるんだよ！」

そう言った

「はあ!？同好会?だから部活紹介にもなかったのかあ！」

「ええ部活じゃないからね！」

俺はボールを拾いこつ言った

「こんな玉遊ぶ何が楽しいんだか！」

すると彼女は顔色を変えた

「ちょっとあなた！それは言い過ぎじゃないの？頑張ってる人にたいていその言い方は…」

「玉遊びだろ！？同好会って事は公式戦にだって出られない！それのどこが野球だ？」

「おいボールどうした？」

グラウンドの隅から声が聞こえた

「あつは〜い今持ってきます！」

彼女はこちらに振り返り手を出した

「返してボール！」

「持つてくよりこっしたほつが早えよ！」

「えっ!?!」

鷹虎は振りかぶり同好会メンバーのクラブ目掛けてボールを投げた

ヒュン

ズドーン

それは辺りを一瞬にしてクラブの中におさまりグラウンドにいたすべての人が動きを止めた

「あつあなた何物？」

鷹虎はもう歩き出していた

ガチャ

「ただいま！」

「おう鷹虎！遅かったな！」

「あのなあ安！人の家に俺より早く入るなよ！」

「まあまあ幼なじみなんだから兄弟みたいなもんだろ？（笑）」

「たくつ！んでそつちはどうよ？一年で期待四番バッター君？」

「まあ上々ですね！お前も野球やめなきゃ良かったのに！」

「へんつ坊主にしてまで野球なんかやりたかねえよ！」

「あつそうかい！内の監督が歎いてたぞ！」

「もつたいない！なんでやめて閉まったんだ！お前と桐島がいたら間違いなく全国制覇できるってな！」

「これはこれは天下の日枝三高の監督にそんな事言われるなんてねえ！」

「そついえばお前の高校に三島夏帆って女の子いないか？」

「三島夏帆？さあ？なんでだ？」

「いやあ美咲の友達らしいんだけどさあお前と同じ高校に行っただけで聞いたからだってよ！」

「三島夏帆ねえ」

第二話 再会のバッテリー

次の日

「じゃ三島さん！こっ呼んで！」

「はい！」

「！？」

(うはぁ三島夏帆だ！同じクラスだったのか…しかもあいつ…)

「おい桐島！聞いてんのか？」

「はっはい！」

三島も驚いた顔で鷹虎を見る

放課後

「ちよつと桐島君良い？」

「ああ？何だよ？」

「ちよつと来て！」

三島は鷹虎の手を強引に引っ張り歩き出した

「はぁ？何だよ？おい離せよ！」

鷹虎の言葉を見殺して歩き続ける

「ふざけんな！話せよ！」

鷹虎は手を振りほどく

「何なんだよ！ふざけやがって！グラウンドの真ん中なんか連れてきやがって！」

「桐島君！ボール投げて！」

「はあ？いきなりなに言っただよ！」

「良いから！」

「クソツ別に良いけど！」

「本気でね！」

「俺が本気出したら誰も取れねえよ！」

「彼でも？」

グラウンドにキャチャーのかっこをした男子生徒が入って来た

「！？豪……」

「久しぶりだな鷹虎！」

「そう言う事か一球だけな！」

「ヨッシャ〜ここだ鷹虎！」

豪がミットを構える

「行くぞ！」

鷹虎は振りかぶりボールを投げた

ヒュン

ズドーン

昨日より大きな音が辺りを包む

「クウ〜痛てえ〜相変わらずだな！」

豪は鷹虎に歩み寄る

「お前も相変わらず良い音で取るな！」

二人はハイタッチする

「どうだまた野球やらないか？」

「やらねえよ！それに同好会なんか野球じゃねえよ！お前野球やめて良い大学入りたいからこの高校選んだんだろ？」

「まあなあ！やりたらないんだ！」

「知るかよ！じゃあな！」

鷹虎はバツクを持ち歩き出した

「もしかしたら部になるかもしれないの！」

鷹虎が止まる

「明日の午後1時から試合があつて試合に勝てたら部になれるの！だからお願い！桐島君の力を貸して！」

「だから？俺には関係ねえよ！」

鷹虎はまた歩き出した

「ダメかあ……」

三島が落ち込む

「気にするな！あいつは昔から一度決めた事はなかなか曲げないからなあ！だかまだ方法はある！最終手段がね！」

「最終手段？」

第三話 借金をチャラにする試合

「こんばんは！」

「いらつしゃい…あら美咲ちゃん！久しぶり！なんか買い物？」

「いえちよつと鷹に用が会って！」

「あらあそう！今安君も来てるから！二階に上がりなよ！」

「ありがとうございます！おじゃまします！」

ガチャ

「こんばんは！」

「おう美咲！こつち座れよ！」

安孝がイスをだす！

「鷹久しぶり！」

「おうっ！」

「なにその気の抜けた返事は？まったく幼なじみが遊びに来たのに
！」

「うるせえなあ！別に頼んでないだろ！」

「あつそれ言つたなあ!」

「おう美咲!落ち着けよ!」

「まったく!そつだあんた夏帆になんか言つたでしょ?」

「はあ?別に何も言つてねえよ!」

「夏帆さつき泣きながら電話かけてきたよ!」

「!?別に…」

「まったく試合くらい出て上げたら?豪も出るんでしょ!」

「なに豪も出るのか?あいつ野球辞めたんじゃないのかあ?」

「ああ!やりたらないんだつてよ!」

「だったらあいつなら内の高校に編入すれば良いのに!」

「さあ?いつもの気まぐれだろ!」

「そんな事より鷹虎!試合に出てあげなさい!」

「でねえよ!たくつあの女!美咲にチクリやがって!」

「あつ夏帆の悪口言つたなあ!」

「つるせえなあ!」

「まあまあ！美咲落ち着けよ！」

次の日 多摩川第二グラウンド

「鷹虎くん来ないなあ！」

「大丈夫だよ！あいつは来る！さあ試合開始だよ」

その頃

「ちよつと鷹虎！あんた何やってんの？」

「ああ？何って昨日録画したビデオ見てるんだよ！」

「あんた今日試合でしょ？」

「はあ？試合って俺関係ないし！」

「あんたねえ！たまには私の言うことも聞きなさいよ！」

「うるせえなあ！」

「じゃあんた今すぐ貸してた五千円返しなさいよ！」

「！？それとこれとは関係ねえだろ！」

「関係無くないわよ！五千円貸した時なんでもします！って言ったでしょ！」

「それは時効だろ？」

「じゃ試合に行ってくれたら五千円チャラにしてあげる!」

「!?!? 本当かあ?」

「うん!」

「ハア、わかったよ行きゃ良いんだろ行きゃ!」

鷹虎は立ち上がり歩き出した

「ありがとう!」

ガチャ

「あつもしもし安ちゃん? なんか鷹虎が試合行く見たいだから! うん! じゃ駅集合ね!」

その頃多摩川第二グラウンド

藤川野球同好会は三回終了時点で5 1で負けている

「ほら! ドンマイですよ!」

三島がメンバーを激励している

「ハア、こんな勝てないよ...」

シヨートの金子が言った

「大丈夫ですよ！まだ勝てますよ！」

豪が言う

「でも豪君…僕がピッチャーじゃ…」

一応ピッチャーを勤める二年の高杉がいう

「大丈夫ですって！高杉さん以外ピッチャーは考えられないですから！さあ攻撃ですよ！」

藤川高校は三者凡退

「さあみんな！守備ですよ！」

メンバーがトボトボ守備に着く

「白井君このままじゃ…」

「う〜んそろそろやばいかあ…来やがったな！」

三島が振り返る

「桐島君！」

鷹虎がベンチに入ってくる

「言っとくけど今日だけだからな！」

「うん！はいこれ！」

三島がユニホームを渡す

「わかったよ！」

鷹虎はユニホームに着替える

「おい審判！ピッチャー交代だあ！」

「！？誰とですか？」

「高杉に変えて桐島だ！」

「桐島：すみませんが試合開始前に提出されたベンバー表には名前が無いので…」

「まあ固いこと言うなよ！公式戦じゃないんだから！」

「おい！あんた！ピッチャー交代だ！」

「わかった！君に託すよ！」

「後は任せろ！」

「よし鷹虎！ウォームアップだ！」

「ああ！行くぞ！」

鷹虎は振りかぶりボール投げる

ヒュン

ズドーン

「痛でてえ…最初から飛ばしすぎたよ！」

第四話 エース登場

「なんだあのピッチャーは？」

「桐島鷹虎ですよ！」

「！？あいつが桐島……」

「鷹虎！次はあの三中で四番打ってた佐伯だ！」

「ああ佐伯智明かわかった！」

「プレイ！」

「久しぶりだな桐島！」

「お前もな！」

「またお前と戦えるなんて嬉しいぜ！」

「ケエツ！戦いになんか何ねえよ！行くぞ」

ヒュン

コチン

「ファール！」

「桐島君のボールに当てた？」

「当たり前よ！彼中学の時天才バッターって呼ばれてたんだから！」

「！？美咲！」

「やつほ久しぶり！」

「桐島君の事はありがとう！」

「まあ気にしないの！」

「おっあいつ佐伯智明じゃねえか！」

「！？彼は……」

「あっはじめまして！美咲の彼氏の三上安鷹です！」

「はじめまして！三島夏帆です！」

「あっ二球目投げるよ！」

ヒュン

カキン

ズサァー

サード飛び込むが取れない

「ファール！」

「ふうあぶねえあぶねえ…鷹虎！引く目だ引く目！」

「わかってるよ！」

ヒュン

カキン

佐伯が打ったボールは真つすぐに鷹虎に向かう

「危ない！」

三島が叫ぶ

パシン

鷹はボールをとる

「あぶねえ！」

「アウト！」

「あれをとるかよお！クソッ」

佐伯がベンチに戻りながら言う

その後は三振に仕留めチエンジ

「ふう危なかった…」

「ナイスピッチ！桐島君！」

「ああ！」

「お前からだぞ鷹虎！」

「俺から！？」

鷹虎はバッターボックスに入る

「さあ来いよ！」

ヒュン

カキーン

「はいさよなら」

白球は高々と跳び場外に落ちる

「やったあー！」

三島が叫ぶ

「ナイスバッティング！」

豪が叫ぶ

「キヤアー！」

美咲が歓喜する

「当然だな！」

安孝がうなづく

鷹虎がベンチに帰って来る！

「鷹虎！」

「豪！」

パチン

ハイタッチをする

「次は俺の番だ！」

第五話 エースの奮起に味方も

「豪！打てよ！」

安孝が声をかける

「ああ！絶対に打つ！」

ザツザ

豪がバッターボックスに立つ

ヒュン

カキーン

「入れ！」

豪が叫ぶ

白球はポールぎりぎりを跳ぶ

「ファール！」

三塁塁審が叫ぶ

「ナイスバッティング！白井君！頑張つて！」

夏帆が叫ぶ

「心配すんなよあいつは打つぜ」

鷹虎がベンチに座りながら言った

三島はふりかえり

「ちょっと桐島君！立って応援！」

カキーン

「えっ!?!」

三島が振り返ると豪が悠々とベースを回っている

「だからいったろ!?!あいつは打つて」

「あっうん!」

「ナイスバッティングだぜ豪!」

鷹虎は立ち上がりハイタッチした

「ああ！甘い所に来たからなあ!」

「よし次宮本さん！頑張つて!」

豪が叫ぶ

「ストライク！バッターアウト!」

宮本がトボトボ戻ってくる

「宮本さん！ドンマイですよ！」

宮本が声をかける

「ハア〜やっぱりダメだ…桐島君達見たいに僕には…」

ガタン

鷹虎立ち上がった

「あんた馬鹿かあ！？はなっから打つ気ねえだろ？」

「えっ？打つ気はあるけど僕には才能がないんだ…」

ガッ

鷹虎は宮本の胸倉を掴む

「ふざけんな！？才能がないだあ？努力もしねえのに才能なんか出るわけねえだろ？」

安孝と豪が止めに入る

「おい！鷹虎！落ち着け！」

安孝が鷹虎を引きはがす

「そつよ！桐島君！暴力は…」

「うるせえっ！こんな野球部に一瞬でも入ろうと思った俺が馬鹿だったよ！」

「えっ！？じゃあ…！」

「試合だけは最後まで出てやる！それにあんたちよつとでも努力してる姿見せて見るよ」

「うっ！？」

バシン

「バッターアウト！チェンジ」

「さあ守備だ！切り替えるぞ鷹虎！」

「けっ俺に言つな！」

タツタツタ

「鷹虎！次は多摩二中の二番だった清水だ！」

「清水かわかった！」

「おっ桐島かあ！」

「よっ！」

「全力で来いよ！」

「当たり前だ！」

その頃宮本は

（努力してる姿…彼はとてつもない努力をしてきたんだ…だから僕も）

ヒュン

鷹虎投げる

カキン

ボールは前に跳ぶ

「シヨート！」

ボールは物凄い速さで二遊間を抜けようとするその時

ズサァー

「痛ててえ…へへ！」

シヨートの宮本がグラブを上上げる

「あっアウト！」

「凄いよ宮本さん！」

豪が叫ぶ

「クツククあなた根性あるな！見直したよ！」

「桐島君！俺努力する…絶対に！」

「頑張れよ！頼んだぜ！ショート！」

「おう！まかせろ！」

「なんか良い感じになって来たね！」

三島が美咲に言う

「うん！鷹が本気になり始めた！」

「えっ！？本気じゃないの？」

「あいつが本気出したら俺だって打てないよ！」

安孝が言う

「さっき打った佐伯と今打った清水でいんだろ？」

「うっうん」

「あいつら中学の時に俺達と戦ってるんだよ！」

「えっ本当！？」

「あの二人な鷹虎と対戦した打席全部三振だよ！」

「本当なの？美咲？」

「うん！本当よ！」

「そんな凄い人だったのかあ……」

第六話 初勝利

「ヨツシャ〜！アウト！」

豪が叫ぶ

「おお〜！しまつてこお！」

鷹虎が以外が大声で声だす

「なんか良い雰囲気だね！」

三島が言う

「そうだね！中々良いチームになるかもね！」

美咲が言う

「俺も鷹虎と一緒に戦いたい！練習試合だから大丈夫だろ！？ユニホームあるか？」

安孝が言う

「あつあるけど」

三島が言う

「ちょっと安！ダメだよ違う高校なんだから！」

「良いだろ！大丈夫だつて！」

「ダメ座りなさい安！」

美咲が怒る

「はっはい」

「バッターアウト！チェンジ！」

「ふう〜流石に疲れるな！」

鷹虎がベンチに座る

「なに言ってるんだ！？お前のスタミナはポケモンだろ？」

「お前なあ〜何ヶ月も野球やってないんだぞ！」

カキーン

「あっ入った」

三島が言う

「えっ嘘！？」

豪が言う

「ヨッシャ〜！これでもう一点！」

打ったライトの国見光が戻ってくる

「ナイスバッティング！国見！」

「おっありがとよ！」

豪がハイタッチする

「あんたばっか良い格好させられないからなあ！」

国見が鷹虎に言う

「ありや豪の他にもまともな奴いるじゃねえかあ！」

「うん！みんな最初は野球やるつもりなかった見ただけど！」

「まあ夏帆ちゃんがあそこまで言うてくれたらね！」

「バッターアウト！チェンジ！」

「良し行くか！」

豪が立つ

このまま鷹虎は全員三振で回を進めて行き

九回表ノーアウト満塁5 4 一点差

「ハアハア」

「おいあのピッチャーバテてんだろ？」
安孝が豪に聞く

「ああなんか俺達の事ナメすぎて変えのピッチャー連れて来てないんだってよ！」

「はあ！？まぢいかよ！」

「さあみんな桐島君だよ！」

ザツザ

鷹虎がバッテリーボックスに入る

「あいつ大丈夫かあ？」

キャチャーに聞く

「連れて来てないんだよ！変えのピッチャーお前が来なきゃバテなかつただろ！」

「ハアハア」

「そつかあ！まあ手は抜かない！行くぞ」

ヒュン

カキーン

「入って！」

三島が叫ぶ

「ファール！」

審判が叫ぶ

「あれが入れば逆転満塁ホームランだったのに……」

三島が言う

「大丈夫だよ！あいつは打つよ」

安孝が言う

「こおいうチャンスの時お前より鷹虎の方が打率良いもんな！」

豪が言った

「ああ！チャンスだけには強いからな！」

「あつ投げるよ！」

美咲が言う！

ヒュン

カキーン

ズサァー

「ファール！」

ボールは一塁線を切りファール

「良いぞ鷹虎！」

豪が叫ぶ

「わかってるよ！」

「ハアハア」

ヒュン

「もらった！」

カキーン

ドン

「ばっバックスクリーン！？」

安孝言う

「ヨツシヤ〜！」

腕を天高く突き上げベースを回る

「ぎゃ 逆転満塁ホームラン！？」

三島が言う

「すごい…凄いよ鷹！」

ワァーワァー

ベンチが盛り上がる

「よし！頼んだぜ豪！」

「ああ！追加点だ！」

「ナイスバッティング桐島君！」

「へんあんな気の抜けたボール誰だって打てるよ！」

「お前じゃなきゃ打てねえよ！」

安孝が言う

「お前なら打てるだろ？」

「まあ俺なら余裕だけど！」

「こらこらあんたらのレベルは一般レベルじゃないからあ！」

カキーン

「はっ入った!？」

「またアベックだ！」

「へい豪！良いぜ！」

「おう！行けたね！」

「あなた達何物！……」

三島が聞く

「何物つてなあ？」

「藤川第二中の四人組よ！」

「四人組！？あつ聞いた事ある！全国優勝した……」

「えっ知らなかったの！？鷹虎なんか何校からオファー来た事か！」

「えっじゃあと一人は！？」

「峰川かあいつは違う高校だ！野球辞めたんだってよ！」

「えっそんな才能あるのに！？」

「さあ？あいつめよくわかんない所あるからよ！」

「バッターアウト！チェンジ！」

「よし！鷹虎押さえるぞ！」

「当たり前だ！」

「次は佐伯からだ！」

「わかった！」

「お前が来なかったら楽勝だったのにわよ！」

「そんな簡単に勝とうと思っなよ！」

「来い桐島！」

「行くぞ！」

ヒュン

ズトン

「ストライク！」

(くそっこいつやっぱり別格だ…)

ヒュン

ズトン

「ストライク！」

「良しナイスピッチ！」

ヒュン

ブン

ズトン

「ストライク！バッターアウト！」

「くそっ！ダメか…！」

「相変わらず良いスイングするなあ！」

「ありがとよ！お前また野球やるのかあ？」

「ああ！やるよ！」

「お前と一緒に戦いたいよ…！」

「よし押さえるぞ！」

バッターアウト！ゲームセット！

「ヨッシャ〜！鷹虎！」

豪が抱き付く

「うざいよ豪！」

「ナイスピッチ！お前最高だよ！」

みんなが駆け寄ってくる

「桐島君！ありがとう！今日だけだけど」

「ヒュン

カキーン

ズサァー

「ファール！」

ボールは一塁線を切りファール

「良いぞ鷹虎！」

豪が叫ぶ

「わかってるよ！」

「ハアハア」

ヒュン

「もらった！」

カキーン

ドン

「ばっバックスクリーン！？」

安孝言う

「ヨッシャ〜！」

腕を天高く突き上げベースを回る

「ぎゃ逆転満塁ホームラン!?」

三島言う

「すごい…凄いよ鷹！」

ワァーワァー

ベンチが盛り上がる

「よし！頼んだぜ豪！」

「ああ！追加点だ！」

「ナイスバッティング桐島君！」

「へんあんな気の抜けたボール誰だって打てるよ!」

「お前じゃなきゃ打てねえよ!」

安孝言う

「お前なら打てるだろ?」

「まあ俺なら余裕だけど！」

「こらこらあんたらのレベルは一般レベルじゃないからあ！」

カキーン

「はっ入った!？」

「またアベックだ！」

「へい豪!良いぜ！」

「おう!行けたね！」

「あなた達何物!…！」

三島が聞く

「何物つてなあ？」

「藤川第二中の四人組よ！」

「四人組!？あつ聞いた事ある!全国優勝した…！」

「えっ知らなかったの!？鷹虎なんか何校からオファー来た事か！」

「えっじゃあと一人は!？」

「峰川かああいつは違う高校だ!野球辞めたんだってよ!！」

「えっそんな才能あるのに!？」

「さあ?あいつめよくわかんない所あるからよ!」

「バッターアウト!チェンジ!」

「よし!鷹虎押さえるぞ!」

「当たり前だ!」

「次は佐伯からだ!」

「わかった!」

「お前が来なかったら楽勝だったのにわよ!」

「そんな簡単に勝とうと思っなよ!」

「来い桐島!」

「行くぞ!」

ヒュン

ズトン

「ストライク!」

(くそっこいつやっぱり別格だ…)

ヒュン

ズトン

「ストライク！」

「よしナイスピッチ！」

ヒュン

ブン

ズトン

「ストライク！バッターアウト！」

「くそっ！ダメか…！」

「相変わらず良いスイングするなあ！」

「ありがとよ！お前また野球やるのかあ？」

「ああ！やるよ！」

「お前と一緒に戦いたいよ…」

「よし押さえるぞ！」

バッターアウト！ゲームセット！

「ヨツシヤ〜！鷹虎！」

豪が抱き付く

「うざいよ豪！」

「ナイスピッチ！お前最高だよ！」

みんなが駆け寄ってくる

「桐島君！ありがとう！今日ただけけど」

「はあ！？誰が辞めるって言った」

「えっ！？」

「今日から入部だ！」

「ありがとう！」

第七話 ライバル出現！？そして…

「ええ〜今から集会を始めるまず一つ先日行われた野球同好会の試合は勝ちだったため約束どおり野球同好会は本日より部として認める！」

オオ〜ざわめきが怒る

「あの同好会が勝つたのかよ！？」

「どんなへボと試合したんだ？」

「なんか凄いピッチャーがいるらしいぞ！」

いろいろ賛否両論見たいだ

「ええ〜もう一つ突然だか転入生が三人入った峰川修二君と桜田良平君と芹沢茜さんだ！さあ三人とも来て！」

「しゅっ修二！？」

「えっ桐島君知り合い？」

「昨日話したじゃねえかあ！」

「あっあの峰川君？」

「そっだよ！」

「ええ〜藤川第三高校から来ました峰川修二です！学年は一年なの

でよろしくお願いします!」

ぱちぱち

「よろしくなあ〜!」

「南多摩川高校来ました桜田良平です!ええ〜なんか今日野球同好会が部になるのでちょうどよかったです!野球部入部ます!学年は一年です!以上!」

「お前野球部かよ!」

「辞めとけ辞めとけ!」

「えっと私立聖心女学園から来ました芹沢茜です!えっとよろしくします!」

「可愛い!付き合って!」

「!?!」

茜は顔を赤くして走って舞台横に消えた

「わっ若葉!?!」

「どうしたの桐島君?」

「いっいや何でもねえ……」

「ええ〜以上解散!」

「よし全員座ったなあ！入って良いぞ！」

ガラガラ

扉が開き転入生の二人が入ってきた

「さっきも聞いただろ！？転入生の桜田良平君と芹沢茜さんだ！」

「げっ同じクラスかよ？」

「あっ桐島なんか言ってたかあ？」

「いついや別に！」

「ったく！スマンなああれでも一応野球部エースなんでね！」

「彼が！？」

「ああ聞いた事ないかあ？藤川第二中の桐島鷹虎って？」

「さあ聞いた事ないです！どうせたいしたピッチャーじゃ無いですよ！」

「へんっ言ってくれんぜ！まあ楽しみは部活でなあ！」

「えっと自己紹介ですよね？南多摩川高校から来た桜田良平です！一応野球部ポジションはピッチャー希望でよろしくお願いします！」

「おっライバル出現だぜ！」

「俺を追い抜くのは簡単だよ……」

「まあそのへんにしとけ！」

「なによあいつ！桐島君に向かって！」

「なに怒ってんの夏帆？」

「別に！それより彼女の方が興味あるなあ！」

「えっと聖心女学園から来ました芹沢茜です！よろしくお願ひします！」

（やっぱり若葉だあ……でも俺の中の若葉は小五で止まってる……）

「ええじゃ席は桜田が三島の隣なあ！あつそこだ！んで芹沢は……桐島の横な！」

「！？俺の横？ちよつと勘弁してくださいよ！」

「何が勘弁だあ！？意味分かんない事言ってるど課題増やすぞ」

「どつちもそんなあ……」

（なんか桐島君変だな……）

ガラガラ

「よつよろしく……」

「!?!?おっ俺にあんま話しかけんな!」

プイッ

鷹虎は窓を向いて寝てしまった…

(なんか私この人に嫌われるような事したかなあ…)

「鷹虎!」

「おっ豪!」

「おい修二の所行こうぜ!」

「あっそうだ!行こう!」

「あっ待って桐島君!私も!」

第八話 新しいマネージャー!?

「おい修二!?!ちよつと良いか?」

鷹虎と豪が修二を呼ぶ

「よつ二人とも久しぶりだなあ!」

「二人の知り合い?ちよつと今話してるんだけど!」

「後で話せ!来い」

屋上

「どうしたんだお前?」

「なにが?ただの転入だよ!」

「いやあそれわかるけど!」

「まあしいて言うならまあお前らと野球やりたっくなっからかなあ
!?!」

「はあ!?!お前もかよ?」

「なんだよそれ?」

「実は俺も野球部なんだよ!」

「えっ豪も！？そお言う事か！」

「まあ良いけど！ちよつと待ってる安に教えてやるっぜー！」

トゥルル　トゥルル　ガチャ

「なんだよ？今学校だよ！」

「わりいなあ安！今大丈夫かあ？」

「ばれなきやなア！」

「ちよつと変わるから！」

「もしもし安かあ？」

「ハア誰だよ？」

「お前藤川第二中の四人組を忘れるなよ！」

「えっ修二かあ？」

「おお正解！」

「何で藤川高校にいんだよ？」

「まあ転入って奴？」

「理由は？」

「まあ野球がやりたくなつた！」

「嘘だろ…お前らなあ！三人最初から野球やる気だつたら俺藤川言つてたのに！」

「お前はダメだ日枝が似合ってる！おつ鷹虎に代わるぞ！」

「もし安びつくりしたべ？」

「心臓止まるかと思つたよ！」

「まあ良いや！お前さあ桜田良平つて知ってるか？」

「桜田良平？さあ聞いた事ないなあ…なんで？」

「いやあ修二と一緒に転入してきた奴何だけどそうとう自信持つてる奴だから有名なあとと思つた！あと…あついいやあ！」

「そつかあ！何だよ最後言いかけたの？」

「いやあ何でもない！じゃ切るぞ！」

「まあ良いや教室戻るかあ！」

「あつあの桐島君？」

「！？なんだよ？」

「いついやあなんでも…」

(やっぱりなんか怒ってる…)

「 ちょっと良いかなあ 芹沢さん? 」

「 あっうん! 」

「 私三島夏帆! 野球部のマネージャーなの! 」

「 よろしく! あのさあ 桐島君ってなんか怒ってる? 」

「 さあ? 分かんないそれより何か部活やるの? 」

「 そうかあ… いやあまだ考えてないけど… 」

「 じゃさ今日良いかなあ 」

「 別に大丈夫だけど… 」

「 ちょっと野球部見てみない? 」

「 えっ あっ はい! 三島さんも一緒ならあ! 」

「 三島さんじゃなくて夏帆で良いよ! 」

「 あっ じゃ私も茜って呼んで! 」

「 おい 鷹虎! 」

豪が三島と茜の横を通る

「若葉ちゃん!？」

「えっどうしたの白井君？」

「いやなんでもない!おい鷹虎！」

「ウニヤウニヤまだ部活じゃないだろ」

「おいあの子!若葉ちゃんに……」

「はあ?他人空似ってやつだよ！」

キンコンカンカン

「ヨツシヤア!行くぞ豪！」

鷹虎はエナメルを手に取り走った!

「よいしょっと!さあ行こう茜！」

「あっうん……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056e/>

フィールド

2010年10月28日08時38分発行